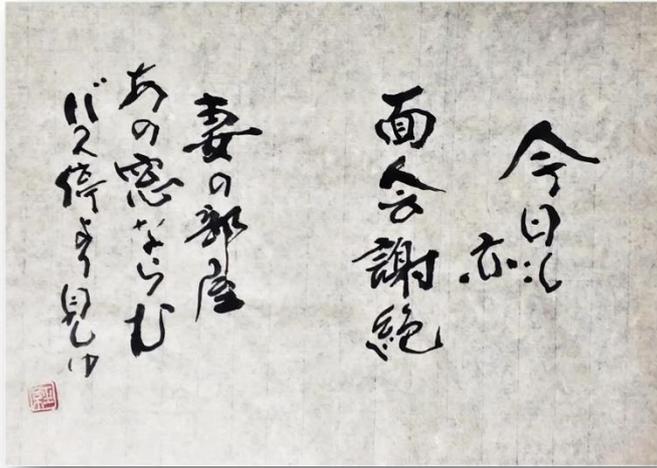


《念海介護歌》

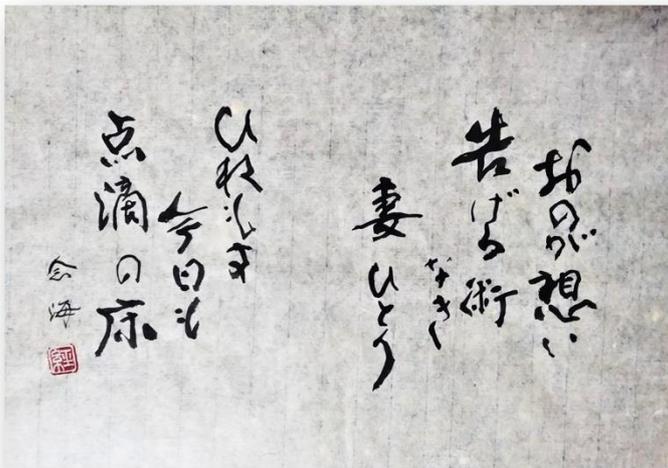
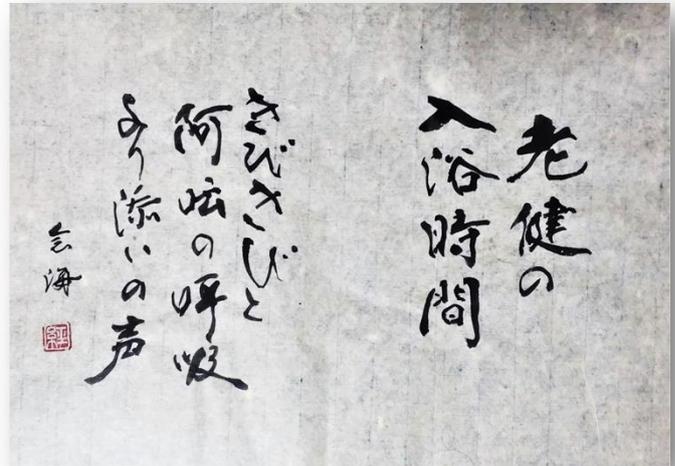


母の入っている介護施設では、スタッフが献身的に介護をしてくれていて、父は完全なる信頼を寄せています。少ない時間と人数の中、きびきびと動くスタッフを毎日見えています。

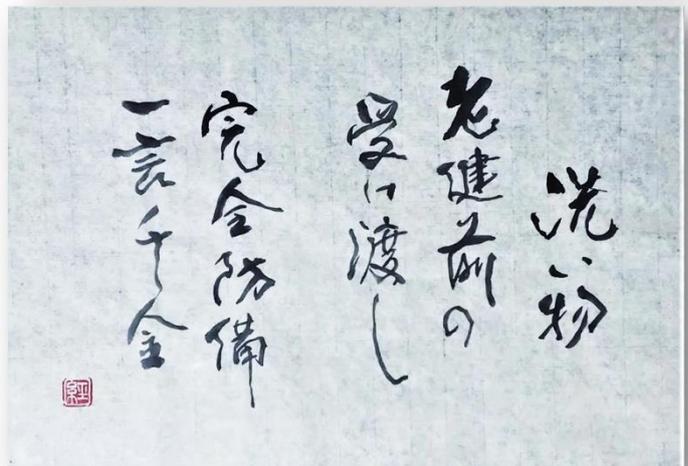
新型コロナ流行の対策として、母の入った施設では、4月、完全な面会謝絶となりました。

認知症を患い、一昨年末入所してより、毎日欠かさず見舞いに通ってた父は、突然の面会謝絶に心をいため、それでも毎日、施設の玄関まで洗濯物や新しいパジャマなどをもって通いました。母が少しでも記憶が戻るように古い写真なども一緒に。

父も九十歳。どうとう車の免許も返上し、慣れない路線バスで通うこともありました。



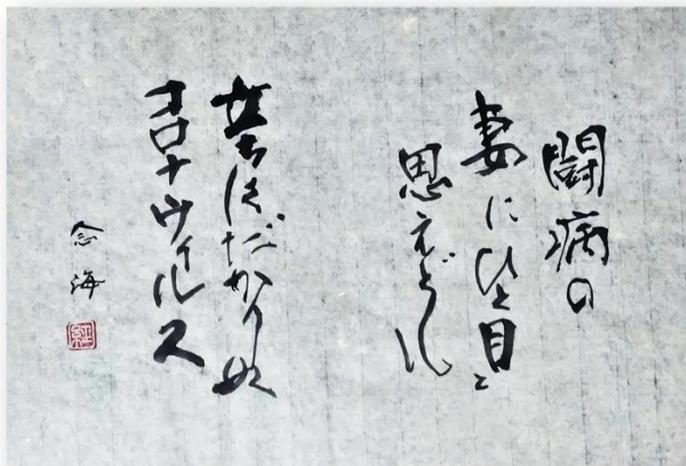
認知症の進んだ母は、見舞いにやってくる父が誰なのかわからない時もあるようです。名前も忘れてしまったけれど、自分にとっても大切な人だとはわかるようですか。力が衰え、一時は食事も受け付けず点滴のみで生き続けた時期もありました。



父は懸命に記憶を呼びさまそうと、古い家族の写真を見せたり、昔の童謡や唱歌をうたって聞かせたり。一日の大半を母の部屋で過ごしていました。

入所して1年間、母の状態は奇跡的に回復し、施設の介護の方からも、父の献身の力だと言われていた、その矢先の新型コロナの流行です。

施設では館内にコロナを入れまいと必死でした。徹底的な面会謝絶はしかたないことでした。



面会謝絶が続く中、父は母を退所させて家に連れ帰りたいと漏らすようになりました。しかし、家で見られる状態でないのは父にもわかっているのです。

